

## はじめに

昭和 26 年(1951 年)、災害の学理とその応用の研究を行うことを設置目的に京都大学に附置された防災研究所は、当初わずか 3 部門の構成でありましたが、平成 7 年には 16 研究部門、4 研究センター及び 7 実験所・観測所を有する大規模な研究所に発展しました。その後も社会の災害に対する脆弱性の増大の中で起こった阪神・淡路大震災といった巨大災害、地球規模の環境変化と災害頻発の懸念、IDNDR(国際防災の十年)支援研究を主導した実績からの災害多発国への積極的な貢献など、国内外にわたって防災学研究への要請と緊急性の高まりが強くなってきました。

こうした防災学研究への要請の変化とその緊急性にこたえるべく本研究所は平成 8 年度、組織を抜本的に見直し、部門・センターの整理統合によって総合防災、地震災害、地盤災害、水災害、大気災害の 5 大研究部門、災害観測実験、地震予知、水資源、火山活動、巨大災害の 5 研究センター制に組織替えをしました。従来力を入れてきた災害を伴う自然現象の予知・予測と災害の防止・軽減のためのハード的な対応法の研究といった理工学的な研究と、被災する側の人間及び社会の問題を人文・社会科学、計画科学、さらには危機管理までを含めたソフト的な研究とを有機的に結びつけた総合的な研究体制の整備をはかりました。これに伴い、研究所の設置目的が災害に関する学理の研究及び防災に関する総合研究に変更されました。そして、改組のもう一つの眼目は全国の大学共同利用の研究所としたことであります。こうした改組とともに、昭和 26 年設置後たゆまず続けてきた研究・教育活動はもとより、わが国の防災研究にあってつねに中心となり新たな研究分野を切り開こうとしてきた姿勢が評価され、平成 8 年度同時に「卓越した研究拠点-センター・オブ・エクセレンス」(COE)の研究機関に認められました。

平成 10 年度には、こうした改組と新体制になった後の研究の進捗状況、プロジェクト研究を中心とした共同研究の進展などを点検・評価することを狙いとして自己点検評価報告書を作成するとともに、国内外の関係研究者の代表(国内 7 名、国外 4 名)による外部評価を受け、概ね高い評価を得たところがあります。自己点検評価報告書および外部評価報告書はいずれも印刷公表しております。

防災研究所は、その後も部門・センター単位の研究活動や観測・実験活動はもとより、共同研究プロジェクト、GAME(アジアモンスーンエネルギー水循環研究観測計画)、UEDM(都市地震防災軽減に関する日米共同研究)、IGCP425(国際地質対比計画文化遺産と地すべり災害予測)などの国際共同研究、阪神・淡路大震災関連調査研究、突発災害調査研究などの研究活動、COE 活動と国際交流、ユネスコや IIASA など国際機関との研究交流協定活動、研究集会や公開講座・シンポジウム・セミナー等社会との連携活動など、活動の幅を広げるとともに、防災科学の COE 機関として、また全国共同利用研究所として、さらには融合化、先端化、情報化、国際化にも積極的な展開をはかっているところです。大学院における教育・人材育成にもこれまで以上に広く積極的に関与しているところであり、また災害の個性化や地域性の進化、さらに新たな環境災害や複合災害など災害の質的变化、にも柔軟に対応できる組織化や官・民との連携も目論んでおり、21 世紀を迎えるこの時期さらなる前進を目指しているところであります。

ます。

この時期、社会に目を転じますと、なるほど防災科学の進展やハード・ソフトのインフラ整備とともに災害による死傷者数は減ってきていますが、地球温暖化や地殻活動の動きともあいまってまたまた風水害や地震・火山災害など、その頻度を高めてきており、社会の都市化・高度化とあいまって被災ポテンシャルの高まりと被害の広域化・巨大化が懸念されております。災害に対する防災・減災のための方策などますます防災科学研究の要請と本研究所への期待が高まっています。省庁再編や大学の独法化など行財政改革、教育改革に連動した研究・教育環境の制度設計の議論や科学技術基本計画の立案などを視野に入れながらも防災研究所はたえず自己点検と研鑽につとめ、新たなテーマにも果敢に挑戦し、防災科学の先端的でかつ総合的研究所としてその責務を果たすとともに、活動内容等の評価を従前にもまして高め、さらなる評価に答えていこうとしております。

本報告書は所内に自己点検評価委員会を設け、全所的な組織運営のあり方を問いつつ、前回(平成10年度)の自己点検評価以降の自己点検評価に供するアンケート調査や資料の収集をはかり纏めたものであり、これまで約1年近く作業に携わっていただきました自己点検評価委員会の皆様の努力に感謝いたします。本報告書が研究所の全構成員に読まれ、21世紀に飛躍する研究所のための糧となることを期待します。

所長 池淵周一